



Title	学会探訪
Author(s)	高木, 昌彦; 前島, 健治
Citation	大阪公衆衛生. 1959, 5, p. 28-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84716
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

京都公衆衛生学会

一般演題は衛研関係12題、保健所関係10題その他3題。衛研からは赤痢菌の薬剤耐性、寄生虫の注浸状態など地味なテーマをとりあげて、衛研の性格を反映させた啓蒙的な内容のものが多かった。赤痢の耐性菌流行とか、案外に多い鉤虫の保虫率など聴衆には「そろきた」とか「おやおや」とか、身近かな事実だけに実感をもってうけとられた事だろう。井手保健所から、和束町の衛生状態について5題出された。和束町は婦人会の地区活動が極めて活ぱつに行われており、保健所の栄養調査、受胎調節、血圧測定などの事業は町会の厚生委員会を通じて婦人会で実施に移されている。だからこそ保健所よりの演題10の内半数が和束町であげられた成果の発表となったであろうが、聞く方としては、婦人会のなりたち、性格、運営等の特徴についてももう少し詳しく話して貰いたかったのではなからうか。日本海側の宮津保健所から、先股脱、くる病の調査成績が示された。前者が発見率1%余り(2,500人中)後者が8.2%である。日光に恵まれない地域の特徴を天候、家屋構造によって丁寧に説明された。

シンポジウム「地域社会における成人病の実態と公衆衛生的対策」では保健所、開業医、病院、大学の4者から夫々発言された。堀川病院の竹沢先生が西陣織従業員を対象としてなされている高血圧の診療業績は感銘深い。医師、看護婦、住民を含む「医療懇談会」を組織しておられる。「予防と治療の結合」という聞きなれた言葉が開業医師から切実な問題として押し出された。医師の公衆衛生活動に参加した際の報酬の問題も出されたが議論の進展はなかった。第一赤十字病院の「人間ドックの実態」は対照的で流石にアカデミックな内容である。このシンポジウム全体を通じて言えば、各関係者がどの部分を担当して、どのような方法で連携を保ちながら効果をあげてゆくか、などの問題がうかがえなかったのは惜しい気がした。(前島健治)

× ×

私が一番聞きたいと思い、又これだけしか聞けなかった「公衆衛生活動と学校保健の連携」というシンポジウムは、どうも不成功に終わったように思われる。学校という一つの集団の健康管理をめぐって、これを盛り上げていく夫々の立場の連携は基本的に重要な

問題であるが、各スピーカーの発言ないし問題点があまりにも生まのまま出すぎて、それで全体としてのまとまりが感じられなかった。あえて感じるというのは、この種のテーマをまとめることは非常にむづかしいことを予想する一方、取り上げ方の如何によってはもっとすっきりできるのではないかと思えるからである。問題点は多く出ていたが、場合によってはプリントでも用意した方が理解し易かったと思えるもの、又討論する相手側の立場を考慮に入れて論点を絞るなど、問題の出し方に一工夫あればもっと変っていたらう。多くの立場の中でも直接保健問題に携わられる学校からの発言に最も具体的なものが感じられた。学校保健法も整備されたとはいうもののこれを担当していく組織はまだまだ弱い、現場に結びついた恒常的な研究グループが生まれ、組織的に検討していく積上げが必要であろう。(高木昌彦)

近畿保健所学会

現場の人々の声に接したいという希望を持ちながら保健所学会に出席するのはいつものことであるが、和歌山での学会は今までも増して失望が大きかった。既に11回を重ね、その間に学会に参加する側も徐々に生長をとげているわけで、「この学会は保健所の日常活動の報告……」という役割も一度考えてみる必要があるのでではなからうか。

各保健所の置かれている立地条件は夫々がいい、地区に特有の問題を持ち、夫々の条件にマッチした事業が展開されているのをうかがえることは誠に興味深い。といってもこの為には4分という時間の中ではよほど想像をたくましくして始めて可能なのである。折角新しい問題を手掛けられてもこの発表形式では現場の様子は浮んでこない。聞いている私がそう思うのであるから、発表している演者ももっと詳しくしゃべりたいという要求はさらに強らう。このあたりで学会運営について広くアンケートでも求めてみたらどうだろう。私の感ずる程に内容そのものを問題にされない人もあってよいわけだ。それならそれなりに年一回の集会を真に楽しいスケジュールにするのも一案である。しかし現場経験を積み上げるのでなければ学会を持つ意義は益々薄れてくるであろう。(高木昌彦)